



お母さんの サンタ大作戦



宮里 和則

ここは東京、品川のＪＲ大井町駅そばにある大井倉田児童センター。

ここには赤ちゃんから高校生まで、そしてそのお母さんたちや若者たちが集まってくる。遊ぶことで仲間ができ、学びができていく。それが児童センターである。

ここで子どもたちやお母さんたちと様々な活動をする中で、まちのおもしろさ、人間のおもしろさをつくづく感じることもある。

今日お話しするのは幼児クラブのこと。幼児クラブはお母さんたちと職員で企画・運営していくクラブである。〇歳から二歳までのクラス、二歳児クラス、三歳児クラス、と現在三つのクラスが週一回活動している。ここでのお母さんの動きを見ていると、そのパワーに驚かされ、このまちの未来は明るいと感じさせられることが多い。

さて、その三歳児クラスのことである。

〈ラーメン屋のサンタ〉

十二月のある日。いつものように階段に座り、みんなで本を読んでいた。本は『ノンたんーサンタクロースだよ』（大友康匠作・借成社）。

その時、突然、

「ねえねえ、カドのラーメン屋さんで赤い服を着て赤い帽子をかぶって、白いヒゲをはやした人がラーメン食べてたわよ、」

雄司君のお母さんがかけこんできた。

「それ、サンタクロースだよ！」

「そうだよ、サンタだよ」

子どもたちは口々に言いだした。

「そうだね、そうかもしれない。見に行こうよ」

お母さんたちが、待ってましたとばかりに言った。

〈作戦会議〉

はじめは何気なかった。幼児クラブのクリスマス

会をどう行うかのお母さんたちの話し合いが図書室

で行われていた。サンタクロースの出方の話で、

「ラーメン屋さんでサンタがラーメン食べていたらおもしろいよね、そんな話題が出たとたん、話し合いは白熱していった。

「サンタクロースを探し歩いて、児童センターに戻ってくると、さっきまで遊んでいたところがパーティー会場に変わっているなんてのはどう？」

「じゃあ、階段の所にサンタの足あとなんかがあったらいいわよね」

こうしてお母さんたちと私たちの「サンタクロース大作戦」が始まったのだ。

〈まちはおもしろい〉

子どもたちは、ラーメン屋さんへ急いだ。ラーメン屋ミニ亭は、本当はまだ開店の時間ではないのに私たちの熱い(?) 思いにこたえ、わざわざのれんを出し店を開け、ラーメンを作りながら子どもたち

を待っていてくれた。

「すみません…。赤い帽子をかぶって、赤い服をきて…」おずおずと話します子どもたち。

「サンタクロース知りませんか？」賢幸君が元気に聞いた。

湯気の向こうからおじさんがこちらを向いた。

「ああ、サンタ。サンタならもうラーメン食べて、おじぞうさんの方へ行っちゃよ！」

顔を見合わせる子どもたち。もう走りだしそうである。おじさんの熱演にお母さんたちも私も、そしておじさんもニヤニヤ。心の中でウインクしている感じだ。

「どうもありがとうございます」「ありがとう、子どもたちは元気いっぱいである。

カドを曲がると文房具屋三松堂。おばさんが外に出て待っていた。おばさんはニコニコしている。

今度は栄一郎君たちが小走りに近づき、話しかけた。

「サンタクロース知りませんか」

「そうね、さっきあっちの方へ行っちゃわよ」三松堂のおばさんは中腰になって答えてくれた。

このことがとてもうれしかったのか、子どもたちはその後、次々とまちの人に話しかけていく。薬局のおねえさん。まちを行くサラリーマン。工事のおじさんたち。

「サンタクロース見ませんでしたか？」

「さあ、見てないなあ」

お願いしていたのはラーメン屋さんと文房具屋さんだけなので、もちろんみんなそう答える。しかし、子どもたちは答えが何であるかもう関係ない。気分はすっかり探偵である。

長い歩道橋を渡っていると、真弓ちゃんと言いました。

「ソリの音が聞こえたよ…」

すると、奈穂ちゃんが、

「今、赤いのが空をむこうからあっちへとんでいっ

◀「サンタクロース知りませんかあ？」



た」と言いだしたのだ。

見上げると。まっ青な雲一つない空。確かに、こんな日は赤いソリが空をよこぎっていてもおかしくない。そして、とても美しい光景だろうと思えてしまう。

「ぼくも見た」という子まで現われた。

子どもたちのイメージは様々な魔法を現実のものにしてしまう。

〈あっ、サンタだ〉

さて様々な遍歴の末たどりついたのは中央公園。

「あっ、あれ！」

見ると公園の一番奥のベンチで、赤い服、赤いズボン、長グツの人が新聞を読んでいる。

「いたっ、サンタだっ！」

駆けていく子どもたち。しかし、三メートルぐらい手前で止まってしまう。そして不審そうにその人を見る。

その人は新聞をおろし、こちらを見る。赤いベレー帽とサングラスをかけている。ちょっとこわい。

そしてゆっくりサングラスをはずすと…。

「ああ、てるちゃんのお母さんだ」

「あら、みんなどうしたの？」

てるちゃんのお母さんがトボけて聞く。引率のお母さんたちは大笑い。

「おばさん！ 何してんの？」

サングラスの姿がこわかったからだろうか、てるちゃんのお母さんをたたく子もいる。

「おばさんは新聞読んでいたのよ。みんなはどうしたの？」

せっかくサンタを見つけたと思ったのにと、ちょっと落胆気味で、子どもたちは答える。

「サンタをさがしてたの…」

「サンタ、サンタなら見たわよ。さつき、この公園でトナカイ散歩させていたわよ」



▶サンタと思ったら…「てるちゃんのお母さんだ」

「エエッ」

〈金のスズ〉

手がかりをさがし公園を歩き回る子どもたち。その時、壮君が「こんなの見つけた」と言つて、金色のスズを持ってきた。

上にかかげみんなに見せると…

「ここにもある」「あつたよ」と、次から次へと金のスズが発見された。おそうじのおじさんたちも、「向こうにたくさん落ちてたよ」と教えてくれた。

「これ、サンタのだよ、きつと」と女の子たちは話している。そして、

「これがないと、サンタは空とべないんじゃないの…」と奈穂ちゃんが言いだした。

そうだったのか、私も知らなかった。彼女の中で空をとぶサンタのソリは、グングンとイメージを広げているのだ。金のスズは魔力で空を飛ぶという話は、考えてもいなかった話だが実に説得力がある。

「そうかもしれないね。サンタに返してあげなきゃね…」、私はみんなに話した。

すると、お母さんが偶然にも（本当はよくわかっていてだが）公園の別の入り口からつづいている矢印を発見したのだ。

そこで、矢印をたどつて、さらに探険はつづいていくのであった。

矢印は児童センターまでつづいていた。そしてセンターの玄関からは、秀和君のお母さんのアイデアのダンボール製のサンタの足跡（？）が二階へとつづいていたのだ。

足跡をたどり、子どもたちは階段をのぼつていった。足跡は図書室までつづいている。図書室からはクリスマスソングが漏れ聞こえている。中のお母さんたちも息を殺しているのだろうか。とても静かである。

「(中に) サンタがいるかな…」

そおっと、のぞいて見ると、中は…。

パーティー会場だっ！

色とりどりのリボンがわたされ、金銀のモールが壁を飾っている。テーブルにはお菓子、フルーツ、ケーキ！そして奥にはダンボールで作られた小さな家。これがあの図書室なのだろうか。お母さんたちの力作である。

サンタクロースは中にいなかった。でもここで待っていたらきつと来るだろう。そんな気がする。

まっかなお鼻の トナカイさんは

いつもみんなの 笑いもの

みんなはサンタをよぼうと歌を歌った。明夫君のアイデアで金のスズをならしながら歌った。

すると…

ガラガラガラ、と扉が開き、

「メリークリスマス！」



▶サンタに金のスズを返したんだ…

「サンタクロースだ！」

お母さんたちの大作戦、大成功であった。

☆

扉のカギは二つあったように思う。

一つは「ラーメン屋さんでラーメンを食べているサンタ」のイメージである。

サンタクロースが食事をするなんて。それもラーメンを食べているなんて。フーフー言いながら、白いヒゲにつゆをとばしているのだろうか。ラーメン屋さんの店内で。あの赤い服はどんなにか目立つだろうか。

日常と非日常のゴチャまぜ。その落差が、お母さんたちの遊び心（いたずら心）を刺激した。祝祭のような勢いで、サンタ探しを作り出すのりを生み出したのだろうか。そして、まちと出会うきっかけともなった。

もう一つは、子どもたちの「サンタクロース知りませんか？」のよびかけ。

まちの人は、この言葉に（この道ゆきを知っている人でも、知らない人でも）ほとんどほほえんで答えてくれる。どんな大人の心の中にも、子どもたちのこんな遊びにつきあう気持ち、きつとあるのだ。

「子どもっていいな」と大人たちはほっとし、やさしくなるのだろう。そして、その時、同時に子どもたちは「大人ってやさしいな」と、大人への信頼を深めていっているのではないだろうか。

ゆげのむこうのラーメン屋さんのやさしいまなざし。腰をかがめて話してくれた文房具屋のおばさんの顔。工事の手を止めて、子どもたちに振り向いて答えてくれたおじさんたち。そんなまなざしにふれる時、子どもたちはこのまちにあなたかく守られていると、つくづく感じる。

まちってやっぱり素敵だな。人間ってやっぱりおもしろい。

（大井倉田児童センター）